

アトリエ 琉游舎 だより 151号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年4月12日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

小休止 大休止



- 小休止は数分程度ですます一時的な休憩、山歩きでは30～40分おきにする軽めの休憩で水分や行動食の補給、汗を拭いて衣服の調整をします。大休止は2時間おきくらいに、荷物と腰を下ろして長めの休息をしっかりとります。元は軍隊用語で行軍に用いられたようです。
- 行軍も山歩きも小休止と大休止を適度に組み合わせながら目的に向かうことが肝要のようです。長い道のりを休みなく歩き続けたならばいずれ息が切れ結局目的を達することができなくなるでしょう。自分の歩むペースを掴みゆっくり慌てず確実にが、私の「行い」にも必要なはずです。休息にも一定のリズムが必要です。座り込んでつい長すぎる休憩を取ってしまうと体が冷えて筋肉が固くなることがあります。ストレッチで体をほぐしてまた再出発です。
- 琉游舎で信行一致の生活を始めて5年半、私は昨年11月～2月まで大休止を余儀なくさせられました。突然の発症と緊急手術、その後の回復のために琉游舎は3ヶ月間の大休止を取りました。3月からは40分の法要を行えるまでに体力も回復し、4月にはラジオ体操にも復帰しました。ただ大休止が長かったせいか筋肉と骨が硬直して体を曲げ腕を伸ばす運動が思うようになりません。動きを回復するまでは慌てずゆっくりと小休止を織り交ぜて歩みます。
- 4月から5月の連休明けまで、琉游舎は小休止に入ります。動脈解離の再発リスクを軽減するために1週間程入院して、残っている乖離部分の補強手術を受けるためです。完全な社会復帰に至るまでの小休止期間と考え、少しの期間信行の歩みを休憩いたします。
- 琉游舎のレギュラー活動予定は以下のスケジュール表の通りとなります。また「琉游舎だより」も2回発行を休止して、次回152号は5月10日に発行いたします。休止明けでたっぷり充電した琉游舎の信行一致の日々をご期待ください。

4・5月スケジュール

4月			5月			
月	火	水	13	14	15	16
17	18	19	20 映画会 お休み	21	22	23
24	25 読書会 お休み	26	27 映画会 お休み	28	29	30
5月1日	2	3	4 映画会 お休み	5	6	7 写経会 13時半から
8	9 読書会 13時半から	10	11 映画会 お休み	12	13	14
15	16	17	18 映画会 13時半から	19	20	21

写経会

5/7日) 13時半

読書会

5月9日
5月23日
(火) 13時半

活動休止

5月の連休明けまで琉游舎のレギュラー活動を小休止致します。琉游舎自体はオープンしています。いつでもご利用ください

3月に再手術を受けることが決まってから1週間に二回ほど手術前検査の病院通いが続いています。昨年11月の緊急手術時は発症場所から救急車で病院へ、そこで大動脈解離A型と診断され、ドクターヘリで埼玉県の病院に運ばれ発症から6時間後には手術室で麻酔をかけられていました。それから8時間後に集中治療室で麻酔から目覚め、手術が終わったことを知らされたのです。その間検査と言えるものは救急病院でCT検査を受けただけです。CT画像が手術先に送られたかは私の知るところではありませんが、殆ど私の体の状態のデータがない中で、手術を施行した医療スタッフの技術と胆力には驚くばかりです。私は手術前の入念な検査も説明も同意書も何もない状態でただストレッチャーの上に横になっていただけなのです。その間救急医が緊急手術受け入れ先を探す電話のやりとりや、執刀医から手術方法やこの手術を行わないと死に至るということを、ごく短い言葉で説明されたのですが、私の耳には死ぬかもしれない恐怖や、ことの重大さを嘆き心配する感情は湧き上がり、ただ人ごとのように客観的な言葉が私の耳の横を通り過ぎていくだけでした。

翻って今回の再手術は事前の検査などの期間が一ヶ月もあり、あれこれと考えることや心配することが増えていきます。再手術の目的は再発リスク軽減のためにまだ残存している大動脈の乖離部分に血管内から補強を施すものです。ネットで手術のやり方を調べてみたり、体をくまなく検査した結果何かほかに悪いところが見つかっていないだろうか、今後は以前のように山歩きができるのだろうか、等々いろいろな情報や心配や期待が入り交じった日々は、前回の自分が死の危険にさらされているという状況を理解しないまま、ただなされるがままに心身を預けていた状態とは大違いです。当時は先々のことを思い悩む余地がない状態に置かれ、すべてをありのままに受け入れることの他に選択のすべはなかったからなのでしょう。病床に横たわる私の上をただ時間だけが何事もなく過ぎていき、その流れそのままに心身を任せるだけの日が2週間続きました。知識のないこと、状況判断を求められないこと、思い煩う余地がないことが、穏やかでありのままの日々を私にもたらしたのです。しかし退院して社会復帰のためのリハビリ期間を過ごし、妻から当時の状況をつぶさに聞き、周りから見舞いの声をかけられるに従い、私の穏やかな日々との認識とは大きな乖離があったことを改めて思い知らされました。確かにやりかけのことがたくさんあり、それをほっぽらかして病床で穏やかな毎日を過ごしていたと語ることは、後始末をしてくれた人たちの迷惑や尽力も考えない身勝手な物言いであることは十分承知した上なのですが、それでも何も考えないでよい日々は安らかな日々だったのです。

退院して2ヶ月後、妻の運転で市内に買い物に行き帰途に救急病院からヘリポートまで救急車で搬送されたと同じ道のりを辿った時のこと、妻が言った一言が私には大きな驚きでした。「今だから言えるけどヘリに移された時、これが最後の別れかもしれない、交わす最後の言葉かもしれない」と思ったそうなのです。私はその時の言葉も、どのような心持ちだったかも覚えていません。私はその時自分がこのまま死んでしまうことがあり得るという考えは全く起こらなかったのです。かといってなんとしても生きてまたここに戻ってくるのだという感情も湧き上がりませんでした。ここに私の身体があり、それはすでに私自身が支配できる状態を遙かに超えていたからです。今その状態を振り返るとそれが「ありのままにある」ということなのです。日常生活で他者との関係性の中にある限り「ありのままにある」ということは厳密に言えば「ありのままにあると意識し続けること」です。ありのままに観てそのままに行くことは私の願いであり誓いです。それを行いに変えていくことが信行一致です。そうありたいという願い（意思）が私を安らぎの所に導いてくれると信じることです。ところがあの2週間の私は願いも意思も何もない「空」のまま安らぎに抱かれていました。

私が「願い誓い行う」の意思を無にして空っぽ（空）のままに安らぎに抱かれていたことは、宗教的に解釈すれば己のはからいを超えて大いなるものに心身を委ねたことで得た安らぎということなのです。ならば法華経の徒の私は、久遠実成の釈迦牟尼仏や日蓮聖人にその時感謝し思いを致すことがあったと思うかもしれませんが、告白すればその様なことは全くありませんでした。仏教徒であることもお釈迦様の存在も法華経の経文の一句も思い浮かびませんでした。お釈迦様や日蓮の弟子としてはあるまじきことなのでしょうが、事実です。ただ安らぎの境地にあったという私があるだけです。教祖や宗教を超えて、大いなる存在（神、仏、真如、実相、ありのまま）に見守られる安らぎに無意識（空）の内に身を包まれていたのです。告白すれば自分自身のはからい（意思）を喪失したときに、初めて己の意思を超えた「ありのまま」が獲得できたのであり、それは己の意思を支配できないことが分かって（死の淵にあって）初めて獲得できるものであるということなのです。

今、死の淵から帰還できたので私は大いなるものとの出会いを振り返ることができています。しかしそれはお釈迦様の弟子であることや毎朝勤行をすることのおかげでは全くありません。日蓮聖人やお釈迦様の力であるわけでもありません。それは私の信行を支え、ともに歩んでくれる妻子や親や身内の者たち、豊かに楽しく過ごすとの願いを共に実践する仲間たち、私を僧侶として必要としてくれる人たち、私と出会い関係する全ての人々、何よりも私が呼吸し触れて観る森羅万象あらゆるもの、それらのすべてと私との間にある交わりの蓄積が私を安らぎの所へと誘ってくれたのです。その蓄積が大いなるものとなり私を包んだのです。それは発症後の安らかな日々と、妻をはじめとする人々の意識の乖離を知らされること

琉游舎：戸井 出琉・恭子

問い合わせ：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

メール：toi101izuru@outlook.jp

翌週私は再手術を受け私の「生きているからこそ」の「信」をよりゆるぎないものにして戻ってまいります。